[事案 2019-197] 転換契約無効請求

・令和2年5月7日 裁定終了

<事案の概要>

募集人の説明不足等を理由に、契約の無効を求めて申立てのあったもの。

<申立人の主張>

平成13年2月に契約した養老保険（契約①）について、平成21年12月に医療保険（契約②）に転換し、平成28年11月には契約②を医療保険（契約③）に転換した。しかし、以下の理由により、すべての契約を無効にして既払込保険料を返還してほしい。

- (1) 契約①について、満期保険金から月払保険料が控除されており、また、支払保険料累計額より満期保険金が少ない。
- (2) 契約②への契約転換時、募集人からは更新の手続きという以外に何の説明もなく、自分の意思ではないのに、高額な保険の申込み手続きをさせられていた。
- (3) 契約③への契約転換時、先進医療特約の具体的な説明もされず、解約返戻金がないことの説明もなかった。

<保険会社の主張>

以下の理由等により、申立人の請求に応じることはできない。

- (1) 契約①について、満期保険金から最後の月払保険料を控除したのは、最後の保険料の支払い確認をするのが満期金支払以降となることがあるため、便宜的に口座引去手続を行わず、満期保険金から差し引いて清算しているものであり、契約にて定められた保険料しか収受していない。また、契約①の満期保険金額は、保険料の累計支払額以上となるように設計されているものではない。
- (2) 契約②について、募集人は、設計書によって申立人に丁寧に説明している。
- (3) 契約③の設計書等に解約返戻金がないことは明記されており、転換時、募集人は申立人に対して、設計書等を用いて解約返戻金がないことを口頭でも説明している。

<裁定の概要>

1. 裁定手続

裁定審査会は、当事者から提出された書面にもとづく審理の他、転換時の事情等を把握するため、申立人および募集人に対して事情聴取を行った。

2. 裁定結果

上記手続の結果、契約①が支払保険料累計額以上に満期保険金が返還されるべきものとは認められず、また、募集人の説明不十分も認められず、その他保険会社に指摘すべき特段の個別事情も見出せないことから、和解による解決の見込みがないと判断して、手続を終了した。